

これだけは押さえておきたい 授業づくりのポイント

特別支援学校が取り組む授業は、障害種に応じた教育課程を組んでいるため多岐にわたります。ここでは、それらの授業に共通した授業の根幹ともいえるべき基本的なポイントを示します。授業の構成を知り、必要なポイントを押さえることが授業改善の第一歩につながります。

1 教材研究 ～豊かな児童生徒理解と深い教材理解～

○ 一人一人の教材に関わる実態を明確にする診断的評価

これまでの学習の評価を基に、これから学習する指導内容について、どこまでできているのか、どのようにできていないのか、活用できる力は何か等、現在の力を客観的、分析的に把握します。

○ ICFの考え方を踏まえた多面的な実態把握から目標設定へ

上記の視点に加え、障害による学習上又は生活上の困難を的確に捉えるとともに、児童生徒が現在行っていることや、指導すればできること、環境を整えればできることなどに一層目を向けることが大切です。これまでの授業の中で、どのような要素が影響し合っているのかを多面的に把握することで、目標や手立てが明確になります。

○ 単元（題材）の設定時に重要なこと

「年間指導計画」、「個別の指導計画」、「児童生徒の実態」を踏まえて、単元（題材）を設定します。設定する際の視点は、次のとおりです。

- ・生活に即した必然性のあるもの
- ・発達の手順に沿った課題性のあるもの
- ・それまでの指導との系統性のあるもの

◎準ずる教育課程の児童生徒は、個々の目標に即した指導内容の精選が必要です。

○ 教材開発と教材解釈

次にどのような教材・教具を通して、目標や指導内容に迫っていくかを検討します。主体性を引き出せるもの（心を引きつけるもの、分かりやすいもの、扱いやすいもの）を設定します。必要に応じて素材から教材開発をしていきます。

教材そのものの価値を十二分に分析し、教材解釈をしておくことが、広がりや深まりのある授業につながります。

2 評価しやすい目標設定の仕方

全体目標を受け、個々の単元（題材）の目指す姿を明確にします。目標設定の際には、下記のように留意したいものです。

- ・個別の指導計画との関連を踏まえる。
- ・観点を設ける。（各教科の観点、各校での授業の押さえ）
- ・授業における目標は、具体的な行動目標とする。

行動を求めるときの条件（いつ、どんな状況のときの目標か）
明確な行動水準（何を評価するのか）、達成の基準（評価基準）
肯定的な表現「〇〇できる」「〇〇する」

（知的障害特別支援学校：体育科「的あてをしよう」の例）

2メートル離れたペットボトルの的に（行動を求めるときの条件）

3回以内で片手でドッジボールを命中させる ことができる。 【知識・技能・理解】
（明確な達成基準） （明確な行動水準） （肯定的な表現） （学校独自の観点）

（準ずる：数学科「基本的な作図」の例）※達成の基準（評価基準）は別に設定する。

定規やコンパスを使って角の二等分線を作図することができる。 【数学的な技能】
（行動を求めるときの条件） （明確な行動水準） （肯定的な表現） （教科の観点）

3 授業のデザイン

授業は、児童生徒自身が主体的に気付き、考え、解決し、人とつながる学びの場です。教員は、児童生徒の活動に応じて、手立てを意思決定しながら、目標達成に向けて支え、個々の学びを引き出します。目標を達成させるために、次の視点で個に応じた支援・手立てを設定します。

 [あすなるホームページ「授業づくりシートⅡ」参照](#)

<p>導入</p>	<p>○ 本時の目標を明確に提示する。</p> <p>○ 本時の活動について具体的かつ端的に説明する。</p> <p>(例) いつまでに、どのような状態になるまで活動するのか。 完成のイメージはどのようなものか。</p>  <p>今日の目標とやることがよく分かったよ!</p>
<p>展開</p>	<p>○ 本時の目標が達成できるように、状況に応じた手立てを選択して対応する。</p>  <p>こうやってやればいいのね。私にもできそう。</p> <p>◇ 個別の学習と集団の学習を効果的に組み合わせましょう</p> <p>実際に授業を考えるときの重要な要素が、個別に指導するか、集団で指導するかということです。一人一人が特別な教育的ニーズを持ちながらも、人は周囲の人との関わりの中で育つものです。個々の学習課題に対して、よりよい形態を見極め、バランスよく取り入れることが大切です。</p> <p>一人一人のできる状況づくりを考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 環境設定の工夫 【適切な空間、刺激の精選、姿勢の配慮等】 ◎ 教材・教具・補助具の活用 【分かりやすい、操作しやすい、安全なもの】 ◎ 教員の働きかけの工夫 【教員自身も学習環境の一つ】 <p>賞揚</p> <p>よい表れを見取り、その場で具体的にほめる（即時評価）ことで、児童生徒の学ぶ意欲を高め、自己肯定感の高揚につながります。</p> <p>発問</p> <p>児童生徒の思考活動を促すものですので、一問一答式ではなく、「多様な考えを引き出す」工夫が大切です。</p> <p>チーム・ティーチング（TT）</p> <p>個別の指導目標、授業展開や役割分担の共通理解はもとより、個々の支援内容を把握し、一貫性のある指導・支援が大切です。</p>
<p>まとめ</p>	<p>○ 授業を振り返る。</p> <p>児童生徒自身の自己評価、児童生徒同士の相互評価 教員による評価（全体と個の評価）</p>  <p>できた！またやりたいな。</p>

4 授業評価の工夫

- 記録方法 …ビデオ、教員の筆記録、観点を定めての記録表やチェック表などがあります。授業記録の内容としては、事実経過、教員の働きかけに対する児童生徒の反応などが挙げられます。
- 形成的評価 …授業の過程で行う評価です。目標に対しての児童生徒の表れから、教員自身の実態把握、目標設定、環境設定、教材・教具、働きかけなどは適切かどうかを複数の目（TT）で評価し、次の指導・支援に生かしていきます。
- 総括的評価 …単元や題材全体の目標が達成できたかを検証するとともに、有効な手立て等を引き継ぐことが大切です。
- 日常的な評価 …TTでの授業の場合、頻繁に会議を持つことは難しいので、日常的な会話の中で評価・改善を図っていくことが大切になってきます。